

温故知新

―途上国研究のわすれもの・新しい架け橋

町北朋洋

●本特集の背景―

大切なものは目に見えない

(サン・テグジュペリ、作家・操縦士、
『星の王子さま』より)

本特集では、アジア経済研究所が創立五〇周年を迎えるにあたり、今後重要となる社会経済的課題に取り組み上で指針となり得る、新しい研究課題と手法を紹介する。特に、これまでアジア経済研究所は現地主義によって成果を収めてきたこと、しかしながら国際環境は大きく変化し、現地主義は国際環境の変化に伴って変化してきた課題の分析や国際環境の変化自体の分析には向かないこと、従って新しい研究分野と手法の導入が今後重要となることをここで主張してゆきたい。

アジア経済研究所だけでなく、日本の大学・研究機関の研究者が途上国を見つめる時、特定の道具に依存しない「地域研究」的手法が選ばれることが多い。まず途上国・地域の言語を習い覚えること

から始め、渡航し、現地で生活し、現地の習慣に倣い、研究対象国・地域を「まるごと」把握することで、日本では得にくい新しい知識、現場の知識を得ようとしてきた。

言い換えれば現地に「どっぷり浸かる」ことによって全体的理解を深め、研究対象の体系を理解するという手法が特に有効性を発揮してきた。特にアジア経済研究所は創立当初から、現地語・現地資料・現地調査に基づく実証研究を指向し、それらの頭文字をとり、「三現主義」として掲げている。

こうした現地主義は、途上国への渡航が研究者にとって極めて高価であった時代では、特に競争力を有していた。現地主義はまた、途上国研究資料の大量蓄積を支えるインフラとしても機能し、研究者コミュニティに寄与してきた。現地主義を掲げることによって、途上国・地域の言語、現地資料に精通し、現地調査を通じて現地に根ざした問題を独自に発掘しうる

専門家を継続的に育成することに成功してきた。「大切なものは目に見えない」からこそ、肌で感じる、あるいは現地での生活を通じて直観を磨く、という手法は大きな意義があった。

一方でアジア経済研究所が歩んできたこの五〇年間を経済地理的視点から振り返ると、世界規模で輸送費用が大きく低下し、ヒト・モノ・カネが国境を越えて、地球規模でも移動しうる「グローバルゼーション」が進んだ。研究者も例外でなく短期の出張を繰り返すことが可能となり、長期滞在型の研究が却って減った。工場の海外進出、移民、留学（頭脳流出・頭脳還流）、感染症、国際養子縁組、そして越境犯罪など、特定国・地域固有の現象というよりも「グローバルゼーション」によって、多くの国の家計と企業を取り巻く諸課題が姿を見せ、それらは今後二〇年間で最も重要となる社会経済的課題の一つに数えられている。

このように、これまでの国単位の現地主義的手法だけでは、接近や理解、そして問題の再定義が容易でないような新しい課題、現象が目の前に立ち現れている。もちろん、上であげた移民や感染症それ自体は、「グローバルゼーション」

を持ち出さなくても、古くから取り組まれてきた重要な研究課題であった。しかし「地域研究」という非常に柔軟な手法をもってしても、現在進行中のこうした話題について深い理解を得にくいとすれば、「グローバルゼーション」によって移民や感染症の性質、それらの影響を拡大させる原因が途上国において劇的に変わってきたからかもしれないし、これらは根源的に、高度な専門性と強い学際性の両方を要求するものであったかもしれない。古くから地域研究者が取り扱ってきた研究課題であっても、現地資料や現地調査、言語修得の意味が近年変わってきたトピックもある。

誤解をおそれずに言えば、地球規模での社会経済環境の変化によって、アジア経済研究所が掲げてきた三現主義だけでは既に「大切なものは目に見えなく」なってしまうのではないだろうか。

●本特集の目的―

伝統とは革新の連続である

(シユウ・ウエムラ、マーケティング
アーティスト)

本特集の目的を述べよう。まず現地主義に基づく「地域研究」が途上国の問題理解と、問題再定義

に資する強力な道具であることは全く疑いがない。しかしながら、国際環境の変化によって途上国で「新しい課題、現象」が立ち現れている以上、それらを深く理解し、再定義し、独創的な知見を得るためには、新しい道具が必要ではないだろうか。本特集では、これまでアジア経済研究所の研究者が伝統的に採用してきた、現地語・現地資料・現地調査から成る「三現主義」をどのように革新できるか、つまり「三現主義＋アルファ」を考える材料となりうる八つの小論を紹介する。

特集の前半は四人により構成され、単眼的に特定国や特定地域への理解を深めるだけでは接近が難しい課題について述べる。山田美和氏と陳天璽氏は、それぞれ移民と無国籍問題を例として、国境という、定められた「ルール」があるからこそ鮮明に映し出される現象を、研究者としてどう理解すべきか、そして個人としてどう関わり、もがき、二つの視点を行き来してきたかを述べる。

初鹿野直美氏は、急速な都市化を遠景として、社会経済環境の変化と共に先住民の土地権利問題の所在と性質が複雑に変化し、それはほとんど不可逆的であることを

克明に記す。環境の急激な変化だけでなく、理念が先行し、変化についていけない脆弱な土地管理行政など、繰り返し返される失敗の源泉を複眼的に突きとめない限りは、古くからある課題を解決する筋道は立たないことを教えてくれる。移民、無国籍問題、先住民の土地権利といった課題は、これまで手が届きそうであった（手を届かすべきであった）のに、何らかの理由でそれをしてこなかった、または出来なかつたか課題もしいない。

森壯也氏による障害研究への案内からは、障害学が途上国を対象とする人文社会科学の守備範囲の外側から内側へとゆつくりと移動し、障害と開発と呼ばれる新領域のアプローチが生まれてきたことが分かる。同時に、このアプローチに対する途上国研究の立場からの批判が紹介され、開発研究全体で多くの眼を導入することの重要性を論じている。

移民、無国籍、土地権利、障害、これらは、われわれ自身の有り様が、社会が設定する「境界」にどの程度依存するのかを考える格好の課題であり、激変する環境下だからこそ、より長期的な視点で、かつ複眼的に再定義されなければならぬ問題であることを強調し

たい。これら四つの小論からは、人々の一瞬の関心が去った後も執拗に観察を続けようとする姿勢を学べるだろう。

特集の後半を構成する四つの小論は、いずれも「三現主義＋アルファ」の「アルファ」の部分を示唆している。ここで紹介されるものは、従来の「地域研究」では手を届かすことが難しいような新しい課題、現象を扱うために開発されてきた道具でもある。

渡邊真理子氏は、産業発展を規定する原理、構造を探るために必要なものは、途上国の企業、産業、市場の変化をいかに正しく観察し、論理的な主張を提示できるか、この一点に尽きることを示す。論理的な主張を支えるのは、事例分析、理論的枠組みの構築、統計分析の補完関係であり、対象を全包括的に理解することの重要性を論じる。

伊藤成朗氏は、開発経済学では薬剤の治験のごとく、ランダムに処置群と対照群を分けた政策評価が行われており、因果関係の特定について長足の進歩を遂げていること述べ、複数の政策評価手法の長所と短所を比較検討した上で、手法を開発、応用する研究者同士だけでなく、評価結果を活用する

政策担当者には鋭い眼力が求められることを主張する。

湊一樹氏は、政治経済学や歴史研究の場合、通常は実験が難しいため、現地の制度、地理や歴史が生む偶然を生かした「自然が行う実験」をランダム化実験の近似として用いる手法による比較制度研究を検討することで、三現主義の利点を最大限に生かし、新しい形の途上国研究を生み出せるのではないか、という問題提起を行う。

最後に横田真氏が全く新しい次世代型の地域研究の「ツール」として、地球観測衛星の社会科学分野における活用の促進を論じる。衛星画像に簡単にアクセスできることが「虫の眼」を用いる地域研究を補完しうる可能性を紹介する。

このように、新しい時代が要請する研究課題については、これまでの地域研究の有効性と限界を特定した上で、新しい手法を探ることがますます重要になるだろう。本特集で示す研究課題と手法を、今後の若い世代の研究者が途上国研究についての新しい伝統を構築する新しい架け橋としたい。

(まちきた ともひろ／アジア経済研究所経済統合研究グループ)